

Organization and Management of Waseda University rugby football club

1K07B220-4 山中亮平

主査 太田 章先生

副査 島田 陽一先生

【第一章 緒言】

2009年度のシーズン、早稲田大学ラグビー蹴球部は圧倒的な力を持っていると言われながら大学選手権二回戦で敗れた。私はそのシーズンチームの先発メンバーとして全試合に出場していたが、試合直後には負ける要因が考えつかなかった。そういったなかで、新監督として辻高志氏を迎え2010年度としてスタッフも一新された形で新体制が始動した。そこで、私が感じたこととしてスポーツの結果を左右するものには技術・戦術的要素も大きくあるが、組織力もまた大きく関わってくるのではないだろうかとも感じた。そこで、筆者の所属している早稲田大学ラグビー蹴球部という組織に注目しどういった組織づくりとマネジメントを行っていけば組織力というものが増えるのかということの研究しようと動機づけられた。

【第二章 組織とマネジメント (運営)】

まずは一般的な組織から考えていくために、アメリカの経営学者のチェスター・I・バーナード (Chester Irving Barnard) の組織に関する考え方を参考に以下のように定義した。組織とは共通目的の下に成立した協働体系をもった人の集合である。このとき、組織規模・経済的環境・社会的環境といった諸要因は組織自体の構造的部分に対して影響を及ぼすが、最低2人以上の人がコミュニケーションをとりながら調整を行い、組織として有機的に活動していればその体系は「組織」である。また、マネジメントに関しても取り上げ、マネジメントの責務を5つ挙げた。第一の責務は構成員に価値観の共有を求めるとのこと。第二・三の責務は構成員の成長を促進させることと、コミュニケーションの活発にすること。第四の責務は組織の中で正確な評価体制を持つこと。第五の責務は組織としての成果を常に外部に持つということである。こういったことをマネジメントの基本として挙げ、その役割を(1)組織使命を果たす(2)人的資源を生かす(3)社会的役割を果たすといった3点として挙げた。

【第三章 第三章 早稲田大学ラグビー蹴球部の歴史とラグビーの競技特性】

早稲田大学ラグビー蹴球部という特定の組織について研究していくため、その組織の特徴を知るために歴史について取り上げた。この部は、94年の歴史を持つ

た日本でも4番目に古い歴史を持ったクラブである。また、日本ラグビー界の発展に大きく貢献していることも分かった。また、当該組織が行っている競技自体にも触れ組織マネジメントを行っていく中で、他の競技スポーツとは違った特徴を持っているのかについて考え、それがマネジメントにどのように反映されていくべきかについても考えていった。

【第四章 現在の早稲田大学ラグビー蹴球部の組織状態】

現在の研究体操の組織状態を把握するためにアンケートを行った。調査対象者は早稲田大学ラグビー蹴球部に所属している大学生124名であった(有効回答83名)。そのなかで、組織が抱えている問題や、強みを検証していった。大きな強みとしては、組織の中では組織使命というのが共通して意識されていたということと、それに伴う価値観というものも共通していたということである。逆に弱みとしては、そういった価値観や使命といったものに対して行動していないという点と、マネジメントがうまく機能していないために「評価体制」と「個人の成長を感じることが出来る環境」が整備されていないということであった。

【第五章 今後のマネジメントについて】

マネジメントの課題として挙げられることは、「コミュニケーションの改善」「成長を感じる環境づくり」「新たな評価体制」「社会的役割の意識」の5つであった。このことはアンケート結果からも出たことであり、早稲田大学ラグビー蹴球部が今後組織として成長していくために必要不可欠な要素だと筆者は考えた。特に、コミュニケーションの改善の部分ではコミュニケーションを「秩序志向」と「接続志向」の二つに分類して考え、より強い組織づくりをしていくために必要なコミュニケーションについて記した。

【第六章 今後の課題】

今後スポーツの組織研究に必要なことと、早稲田大学ラグビー蹴球部という限定的な組織について研究したことにに関して記述し、それに関する課題を記した。今後こういった研究が進んでいくためには体系的な研究が確立されていく必要があるのではないかと筆者は考えた。また、その発展を望んでいる。